

令和6年度 奈良市立神功こども園 研究実践概要

園長名 山中 理恵子  
全園児数 150名

1. 研究主題 子どもの「声」を聴く保育  
ー子どもの表出とそのきっかけにみる子どもの思いー

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

子ども理解を深めるため、昨年度より、子どもの「表出行為」に焦点を当てて職員間で協議を行ってきた。その中で、表情や仕草、行動などからも、子どもの思考や感情を読み取っていくことが重要であることや、表出のきっかけとなる“ひと・もの・こと”や子どもの思いの変容等、何にどう子どもが心を動かされているのかを考えていくことで、日々の保育の手がかりとなる援助や環境の大切さを職員間で共有した。これらのことを踏まえて、今年度は、子どもの表出のきっかけとなり得る“ひと・もの・こと”との関わりについて検討を進めていく中で、子どもの「声」を聴くことへの理解をより一層深めていくことができるよう、本主題を2年目のテーマとして設定する。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

遊びや生活の中での子どもの「表出行為」から子どもの思いを探るとともに、その表出行為のきっかけとなり得る要因について検討して、子ども理解を深める。

②研究の重点

- ・実践や事例から子どもの遊びの中での表出行為に着目し、職員間で共有、検討できるよう研修方法を工夫しながら、子どもの思いや心の動き、遊びへの興味・関心について読み解きを深める。
- ・どのような要因が子どもの心を動かしているのか、“ひと・もの・こと”に着目し、子どもの思いを支える発達に応じた環境や援助について探る。

③活動の方法

- ・0～5歳児の事例を基に毎月職員間でエピソード研修を実施。研修内容は次の通りである。
  - ▶子どもが自らの情動を表出する行為を抽出し、その表出の契機となった心を動かされる要因となる「ひと」「もの」「こと」に着目しながら子どもの思いを読み解き検討する。
  - ▶エピソードに見られる年齢の発達的特徴を捉え、環境や援助の在り方を検討する。
  - ▶研修を通しての職員の気づきや学びに関するアンケートを、前期後期の2回実施する。さらに、園内研修の意義や気づき、学び、年間通しての意識の変化等について分析したものをまとめて職員間で共有し、振り返り、成果や次年度への課題を見出す。
- ・各事例については、子どもの思いや行動が大きく変容したと考えられる箇所に下線を引き、その基盤や契機となっている要因に網掛けをして、上記内容を検討、分析した。さらに、各エピソードにおいて子どもの心を動かす要因となっていると考えられる内容を、それぞれ「ひと」○「もの」□「こと」□の中を示す。

## a 実践事例より

### 事例1 0歳児5月「何がついているのかな」

A 児が日頃から音を鳴らしている遊んでいる鈴付き玩具を、「おもちゃあるよ。ここまでおいで」と保育者が鳴らし、A 児（8カ月）の見える場所に置いた。A 児は玩具に気づき、片腕を伸ばしたまま、ずりばいで前へ進んだ。玩具に手が届くと、ガシツと掴み仰向けに寝返りをした。A 児は「あ〜」と溜息に近い声を出して、いつものように玩具を見ながら振って音を鳴らした。

音の鳴るおもちゃ

安心できる保育者の存在

<考察> A 児がよく遊んでいる玩具を、手に取りやすい適度な距離間で置いたことで、触ってみたい思いを持ち、手を伸ばし、ずりばいをしようとする行動へと繋がった。普段から子どもに笑顔向け、優しく言葉を掛けるなどの関わりを大事にしてきたことが、安心したような「あ〜」という声や、玩具を振って満足げに音を鳴らす0歳児の表出に繋がったと考察する。



### 事例2 1歳児7月「ジャンプ！」

B 児が台に登ってジャンプする姿を見て、同じように台に登り始めたC 児。上に登ると、硬い表情でじっと止まったので保育者が手を差し出し「どうする？」と声を掛けると、ハイハイするように後ろに降りていく。今度はB 児が「ジャンプ」と言ってジャンプする。もう一度行こうかやめようか悩んだ様子のC 児に「C ちゃんもジャンプする？」と声を掛けると台に登り「ジャンプ」と答え、保護者の手を持ち台の端に座り込む。台に手をつき小さく“びよん”と飛び降り、「ジャンプ」と言いながら嬉しそうに保育者の顔を見た。

A 児がジャンプする姿

保育者の言葉

安心できる保育者の存在

<考察> 積極的にジャンプしているB 児の姿を見て、ジャンプしてみたいけれど高さのある場所が怖いC 児。その気持ちを保育者が読み取り、タイミングをみて言葉を掛けたり手を差し伸べたりしたことで、C 児は安心して飛び降りてみようとしたのではないかと思われる。達成感を感じたC 児は、「ジャンプ」という言葉を口に出し、嬉しさを保育者に表情で伝えた。1歳児は、視野が少し広がり自分もやってみたいと思う気持ちが芽生え始めるが、思いを伝えることがまだ難しい。保育者は一人一人の表出を見取り、特性を理解したうえでその場やタイミングに適した言葉掛けや援助を行うことが重要だと考察する。



### 事例3 2歳児10月「はいった！はいんなあーい！」

D 児が斜めに立てかけた机でドングリを転がして遊んでいた。D 児がバケツを机の前（地面）に置いてドングリを転がすと、バケツに当たって少し横に飛んだ。それを見たD 児が「はいんなあーい」と側で一緒に遊んでいた保育者を見て笑顔で言った。「うん、はいらなかつたね」と保育者が言うと、D 児は目を合わせて満面の笑みを浮かべた。次にD 児は、バケツを机に沿わせて上からドングリを転がし、バケツに「はいった」「はいんなあーい」とドングリを転がすたびに嬉しそうに保育者を見て、保育者とのやり取りを楽しんでいた。すると、D 児はバケツを持ったまま、保育者にドングリを差し出し、保育者が転がしている様子を嬉しそうに見ていた。

ものを転がして遊んだ経験

目につく所に落ちていたドングリ

安心できる保育者

<考察> 坂になった場所でペットボトルキャップやガチャボールを転がして遊んでいた春からの経験と、園庭にたくさん落ちている“ドングリ”との出会いが重なり、不規則に転がるドングリの面白さを感じながら転がし遊びを続けていたのではないかと思われる。保育者がD 児の思いを受け止め、言葉に表して共感しながら、側で見守り一緒に遊ぶことで、言葉のやり取りを楽しんだり、自分なりに考えて行動しようとしたりする表出があったと考える。このことから、2歳児は、遊びを見守りつつ共感してくれる存在(保育者)があることで安心感をもち、面白いことを見つけたり、言葉で伝えたり、やってみようとする行動で表したりすることができ始めるのではないかと考察する。



#### 事例4 3歳児11月「これ使っていいよ」

ハンガーラックについていた洗濯ばさみ3つを使ってE児はトンボを作り「先生、トンボだよ」と言った。「わあ！ほんとだね」と保育者も共に喜び、一緒にとんぼのめがねを歌いながら眺めていた。F児が来て隣にある洗濯ばさみで作り始めた。E児と同じように作ろうとするが、なかなかできなかった。その様子をチラチラと見ていたE児は自分のトンボを解体し、F児に近い洗濯ばさみを一つそっと渡した。F児はそれを使って作り「できたよ」と笑顔がほころんだ。保育者が「ほんとだ！Eくんが洗濯ばさみをくれたからだね、よかったね」と声をかけると「Eくんありがとう」とE児の目を見て笑顔で言った。E児はうなづき反対側の洗濯ばさみを使ってトンボを作り、二人で「トンボさん飛んでるよ」とトンボのめがねの歌を歌っていた。

過去の経験

共感する保育者

洗濯ばさみのトンボ

見守りながら待つ保育者

<考察> 以前から洗濯ばさみで遊んでいたことやトンボの表現遊びをしていた経験が遊びに繋がったと考える。E児の喜びを保育者が共感し満足感が高まったことを基盤に、困っているF児の姿を見ることがきっかけとなって、自ら関わる姿に繋がった。3歳児は友達を作る魅力的な「もの」や作ろうとしている友達と同じ「もの」を介して友達への関心が芽生え、関わりが生まれる時期である。保育者の共感や見守りつつ待つ援助は、友達への関心が高まり関わる姿に繋がったと考察する。



#### 事例5 4歳児9月「どれが固まるかな？」

G児は保育者と一緒にサラ砂と水を混ぜた物を型抜きに入れてクッキーづくりを楽しんでいた。保育者がサラ砂を作ると、G児はレンゲを使って少しずつ水を入れていた。泡だて器を使ってサラ砂と水を混ぜると、「固まってきたからいけるわ！」と笑顔で型抜きに泥を入れていた。1つ入れ終わると「次はもうちょっと水を入れてみる。」と言い、またレンゲで水を入れていた。「さっきより多く入れてみる。」とG児が言ったので「水の量変えるの？」と保育者が聞くと「うん。おもしろそう。」と言いながら、水を入れたり混ぜたりすることを繰り返していた。6つある型抜き全部に泥を入れ終わると、「ここは水が普通。ここはちょっと多い。ここは少なくした。ここはサラ砂だけ。」と、ひとつひとつ指差しながら保育者に説明した。保育者が「全部固まるかな？」とG児に言うと、「どれが固まると思う？僕は水が多いやつと笑顔で答えた。」

繰り返し試せる場

一緒に遊ぶ保育者

水の量を意識させる保育者の投げかけ

水の量への意識

泥の変化

<考察> 1学期からしていたクッキーづくりで、少しずつ固まる泥と固まらない泥の違いに気付いている姿が見られた。G児と一緒に遊びながら泥を作る中で、「水を多く入れる」と言うG児の言葉を「水の量を変える」と保育者が言い換えたことがきっかけとなり、水の量に意識が向き、量を調整したらいいという気付きに繋がった。この時期の4歳児は遊びの中で様々なことに気付き、自分なりに試そうとする姿がある。子どもが気付きを言葉や行動にしている時に、保育者がより具体的な言葉への言い換えや行動を言語化することが、子どもの中で気付きがより意識化すると考察する。



#### 事例6 5歳児6月「これが一番いい」

砂場でH児が透明の細長いホースにジョウロで水を流し始めた。H児は「でもこのジョウロ、水すぐなくなるねん。」と周りを見渡して、笑顔で「あっちよっと待って」とその場を離れ、大きいやかんを持ってきて水を汲んで細長いホースに流した。その様子をI児がジョウロを持ってずっと近くでながめている。H児は「めっちゃこぼれるやん。なんでなん」と怒っている。それをみていたI児がやかんを指さして「全部ここ(やかんの注ぎ口)が(ホースの口)に入っていないからやん」とつぶやいた。すると、それを聞いたH児は「あっわかった」と思い出したかのように透明の太いホースを持ってきて、やかんの注ぎ口を太いホースにさして水を流した。H児が嬉しそうに保育者の方を見る。保育者も笑顔で「ぴったりやん。よく考えたね」と応える。その後H児がやかんの中を見ながら「なくなってきた」と言っているのを聞いて、近くにいたI児がジョウロに水を汲みにいき、やかんにジョウロの水を入れた。H児は「うん。これが一番いい。」と満足気な様子で叫んだ。

積み重ねてきた経験

友達のつぶやき(ヒント)

用具の特性理解

イメージに合う用具の選択

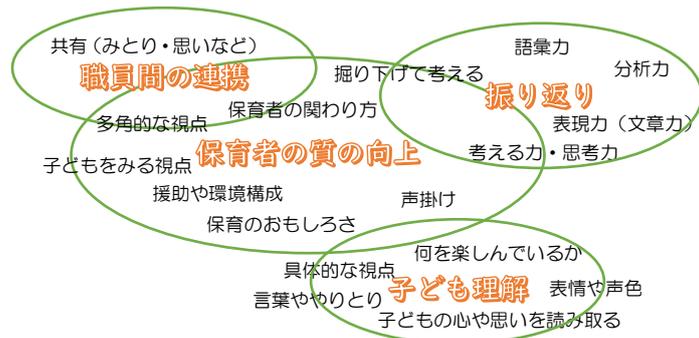
タイミングよく認める保育者

<考察> H児の怒っている様子を見ていたI児のつぶやきは、H児の気付きのヒントとなり模索していた気持ちを変えるきっかけとなって遊びが展開していった。H児の行動を「見る」事で参加していたI児は、遊びに入るきっかけを探しているようにも感じたが、H児がI児のつぶやきを拾い聞き入れたことで、自分の思いが友達に伝わり受け入れられたというI児の喜びや自信となって、その後遊びに加わるという行動に繋がったと考える。5歳児は友達と関わり意見したり、自分の考えと友達の思いを合わせて遊びを進めていこうとする姿がある。そして、保育者のまなざしや認める声掛けは、子どもたちが意欲的にイメージを具体的に形にするために考え、試行錯誤する姿につながる要因となっていたと考えた。



## b 職員アンケートより

研修を通して、子どもの思いや保育への思いについて職員間で共有することの必要性や再認識といった「職員間の連携」、多角的に子どもを見とる力、受容性や年齢や個に合わせた柔軟な保育者の関わり方などへの意識が高まったという「保育者の質の向上」を多くの職員が感じていた。さらに、研修を繰り返して実施してきたことで、多角的な視点から対話を繰り返し、保育のおもしろさを感じ、声掛けや援助、環境構成を考える機会となって「保育者の質の向上」に繋がり、子どもの姿中心で話を進めてきたことで、具体的な視点で子どもが何を楽しんでいるのかを考え、言葉ややりとり、表情や声色など子どもを見とる力がつき「子ども理解」が深まっていた。また、子どもの思いを掘り下げて考える思考力が身につき、語彙力や表現力、分析力に繋がっていると自らの姿を「振り返り」、保育者としての育ちを実感することができていた。(図参照)



図：研修を重ねてきたことで得られた力

## 5. 研究の成果

- 0～5歳児各学年での事例の読み解きから、子ども達の日々の様々な経験の積み重ねの中には、それぞれの発達に沿った多くの気づきや学びがあり、それらが次の主体的な子どもの姿・活動に繋がるものになっていくことがわかった。また、子どもの表出行為のきっかけを探る中で、安心できる保育者の存在を基盤に、園や家庭などの過去の経験、さらに年齢特有の“ひと・もの・こと”との関わり方、発達や姿に応じた保育者の援助(関わり方・見守り方・距離感など)や遊びながらの環境の再構成が、心を動かす大きな要因となっていることがわかった。
- アンケートを実施したことで研修後に再度自らの保育を振り返り、整理をして考え直す機会となった。結果をまとめ職員で共有することで、他の職員の多角的な意見を知ることができ、その意見を受けて自分を振り返ったり、新たな気づきを得たりすることができた。また、研修を通しての保育者の育ちには様々な要因が関わり合っていることが明らかになり、保育者自らの学びや保育において大切なことを自覚すると共に、研修で語り合うことの重要性を再認識することができた。

## 6. 今後の課題

- 子どもの表出、「ひと」「もの」「こと」に視点をあてて研修を進め、子どもの思いやその要因となったきっかけを探ることで、保育者の存在や関わり、環境構成が大きく関わっていることを再認識した。これらのことを踏まえて、今後も、年齢発達に応じた“ひと・もの・こと”との関わりを深く読み取るとともに、保育者の存在や関わり、環境構成の具体的な在り方を探り、より一層子どもの心に寄り添った保育を目指していきたい。
- 今年度の研修方法においては明日の保育に直接的に繋げることが難しかった。今年度の成果を活かし、明日への保育につなげられるような研修日程や方法を検討し、研修の充実を図り、保育の質の向上に努めたい。